

# 近世における動詞多数形のアクセント

—近松世話物浄瑠璃を資料に—

## はじめに

動詞のアクセントは活用形によって異なる上に、下接する助詞・助動詞の接合状態によっても相違する。さらに、近世においてはアクセント体系変化を経て、非常に複雑な様相を呈している。そのアクセントの史的变化のなかで、使用頻度の一番高い連用形は他の活用形のアクセントに対して少なからぬ影響を及ぼしていると思われる。例えば、近世末から現代京都までに起こった、二・三拍二類動詞の連体形・終止形の●○○↓○○●●という低起式化は使用頻度の高い連用形一般が低起式を保っていたことにも一因があるという。(一)

そこで、近松世話物浄瑠璃譜本(以下、丸本とする)における連用形アクセントと下接する付属語との関係、及び胡麻旋譜状態について考察を行うことにし、本稿ではアクセントの分類が明確になる二類動詞について述べる。考察対象は、語類が明確な三・四拍動詞まで。出典の詳細は、坂本清恵編『近松世話物浄瑠璃

坂本清恵

胡麻章付語彙索引 体言篇』(アクセント史資料索引五号 昭和六二年一月)を、動詞用例は『同 用言篇』(同八号 昭和六三年六月)を参照されたい。旋譜例掲出に当たっては、上げ胡麻を「上」、平胡麻を「平」、下げ胡麻を「下」、胡麻なしを「×」、特殊胡麻を「\*」で、文字譜の「ハル・ウ・中」はそのまま表示することにする。△▽に胡麻旋譜例。「」内は、胡麻の施された該当語を原文のまま掲出し、必要に応じて「」に漢字や仮名の注を添えた。( )は掲出箇所を示した。なお、○●▽△などは本来アクセント記号として使われるものだが、本稿ではアクセント以外の高低の語りを示す場合や、音楽的な要因でアクセントが変化しているものにも使用した。

一 連用形一般のアクセント

連用形の分類において、同じ近世の資料である『平曲』の連用形アクセントと同じ様相を示すかどうかは、一般形以外の用例があまり多くないので判然としないところもある。

丸本では、連用形一般は中止形・複合動詞の前部成素、接続助詞「て・つ・に」・助動詞「た・たり・けり・ます・つ・ぬ」などが接続するもので、まさに多数形といえる。

以下、それぞれについて用例を挙げながら考察する。

「一一」中止形

一拍、及び一・二拍動詞には例なし。

二拍動詞は、低く平らな語りを示す旋譜が多く、△下下▽「すり」[擦]（今三三ウ6）「立」[たち]（堀二三ウ6・淀一六ウ1・冥四一ウ3・夕九オ2）など一七例で、●●を示す△上△上▽「くみ」[組]（薩一一オ4）△下××▽「とり」[取]（堀一〇ウ1）は五例。

二・三拍動詞も二拍動詞と同傾向で、前者が一三例、後者が六例である。前者の旋譜は、上昇調を示す旋譜でなくとも、低起式を反映するものと考えられよう。二拍動詞の●●を示す△上××▽「成」[なり]（油二八オ6）は強調を示す例か。

二

三拍動詞は、●●を示す△上××下下▽「た、き」[叩]（絵一ウ7）「なげき」（絵三一ウ2）△上×××▽「なやみ」（淀三六オ4・三七オ2）などが二一例で多数を占めている。すでに述べた連体形・終止形などにおいてみられる●●と揺れる●●を示す旋譜例は、連用形においては義太夫死後の作品に△上上下下▽「さはぎ」[騒]（経一七オ6）など三例あるにすぎない。（2）

三・四拍動詞も三拍動詞と同傾向で、●●が△上×××▽「あはせ」[合]（曾一九ウ4・網三五ウ7）、△上××下下▽「はなれ」[離]（今四〇ウ3）「任せ」（小四〇ウ5）など一二例で、●●は、義太夫生前の作品△上△上\*▽「合せ」（冥三六オ4）、死後の作品△上××下下▽「別れ」（山一五ウ6）の二例。

「一二」複合動詞前部成素

複合動詞の前部成素については、複合の状態や、韻律と語り方との関係などの問題が存するので、ここでは旋譜傾向と用例数のみに言及し、詳しくは別稿に譲る。

一拍動詞は三六例が●●が二例あるが、義太夫死後の作品の例。

二拍動詞は、義太夫生前と死後の旋譜例に顕著な相違がみられる。生前は●●が二九例。●●が一一例で、低起式を保っている例が圧倒的に多い。高起例は●●六例、●●八例。一方、死後

は低起例が○●六例、○○六例。高起例が●○三三例、●●が一三例である。義太夫死後の高起例は○○から体系変化した結果などではなく、前部成素本来のアクセントを何等かの理由で保てなかったか、旋譜方法の変化にその原因を求めるべきものである。

二・三拍動詞も二拍動詞と同傾向。義太夫生前の例は○●が六九例、○○五例、●○三例でよく前部成素のアクセントを保っている。それに対して、死後の例は○●は二三例、○○一例、高起例の方が多く、●○八例、●●七例。しかし、義太夫死後の作品例に●○が多くみられる傾向は、このみに限ったことではない。三拍動詞は、●○○と●●○が義太夫生前・死後の作品の別にかかわらず、同じように見られる。●○○五八例、●●○四六例。●×○三例も最初の下がり目に注目すべきと考えれば、●○○に入るのだろう。

三・四拍動詞は、●○○一例、●●○五例。

### 「二二三」助詞「て」のつくもの

連用形二拍に「て」がついた旋譜例には、○▼を示すへ上下V「来て」（網九オ6）へ×上V「見て」（絵二五オ6・堀一五ウ3・重二二オ7）など二四例、本稿末尾に影印（A）を掲載。▼を示すへ上×V「見て」（網一ウ3・宵三六ウ6）へ上×V「見て」（油三七ウ6・宵二二ウ7）四例すべて義太夫死後の作品例。用例数や、義太夫生前か死後の作品かなどを考えると、○

▼が、当時のアクセントを反映しているかのように思える。しかし、『名義抄』「経てへ去上V」、『古今集』へ上上V、『平曲』へ上上V、現代大阪●▼・●▼であり、丸本のみが特殊例になってしまふ。

なぜ○▼を示す胡麻旋譜が多いのか。『古今集』に見られるへ上上Vは実際は○▼で、（<sup>3</sup>）近世○▼になり、近世から現代までに他の一般形が●であるため、○▼↓●▼・●▼になったものだろうか。あるいは、「て」接続の例が連用形では多数形であるにもかかわらず、連用形特殊や連体形・終止形の低起式に影響を受け、○▼のような語りがされたのだろうか。

思うに、丸本のへ×上Vは、アクセントの高低を反映しない胡麻旋譜例なのではないか。当該箇所へ×上Vは、次にすべてなみだ点に来て、息継ぎとなる。なみだ点の直前にアクセントの高低とは異なる上げ胡麻が施される例は枚挙にいとまがない。その例として二拍名詞「顔」への旋譜状況を参考にする（本稿末尾に影印（B）掲載）。

「顔」は一類名詞で、鎌倉来●●のアクセントを持っている。丸本でアクセントを反映した例には上げ胡麻が二つ施される。

- ① 「かほへ上上V」（曾一五オ6）
- ② 「かほへ上上Vさへ」（生四六オ5）
- ③ 「かほもへ上上×V」（紅七ウ7）
- ④ 「兒もへ上上×V」（堀一五ウ7）

これらは●●をよく反映した例であり、次は、なみだ点の直前に上げ胡麻がある例である。

- ⑤ 「とのごのかほ $\wedge$ ×上 $\vee$ 。」(堀一六ウ一)
- ⑥ 「親のかほ $\wedge$ ×上 $\vee$ 。」(万一八オ六)
- ⑦ 「きかぬかほ $\wedge$ ×上 $\vee$ 。」(水一ウ五)
- ⑧ 「ぬかすかほ $\wedge$ ×上 $\vee$ 。」(冥一七ウ二)

このなみだ点の直前の上げ胡麻は、高を示すというよりも韻律の切れ目の独特の語り方を示したものと考えた方がよいと思う。

あるいは、語末・句末・文末などのイントネーションのようなものを表す胡麻なのかもしれない。つまり、二類動詞連用形一拍に接続する助詞「て」のうち、なみだ点の直前にある $\wedge$ ×上 $\vee$ の旋譜はアクセントとは関わりないものであるとよかろう。

●▽を反映するのが世話物では義太夫死後の作品例のみ。時代物には、 $\wedge$ 上上 $\vee$ 「みて」「見」からは「(十二段三三ウ四)がある。丸本では●▼と●▽とを認めるか。

二拍動詞は「て」接続の場合には、音便形・非音便形とも低起式例が多い。漢字表記のために、音便形か非音便形か不明なものは例を別にした。

音便形は $\wedge$ 下×× $\vee$ という○●▼と○●▽とのどちらかを反映するのか不明な $\wedge$ 下×× $\vee$ 「あふて」「合」(タ一二オ八)「あつて」「有」は「(曾一二オ七)」「よんで」「読」(紅一二オ一)など四八例。「て」が確実に低く付くと思われる例はイ音便の $\wedge$ 下

四

上下 $\vee$ 「ついて」「付」(冥九ウ一)の一例のみ。多くは従属型を反映する $\wedge$ ×上 $\vee$ 「たつて」「立」も「(万六ウ七)」「 $\wedge$ ×上 $\vee$ 「きつて」「切」(淀六ウ一)」「よんで」「読」(堀一六オ六)」「 $\wedge$ 下×上 $\vee$ 「なつて」「成」(念二八ウ三)」「 $\wedge$ ××上 $\vee$ 「きつて」「切」(水四〇ウ七)」「もつて」「持」(今一五ウ四)など一二例で、ウ音便・促音便・撥音便に見られる。また、高起式の例も一二例あるが、うち九例が義太夫死後のものである。

非音便形は、用例が少なく、「て」の高さの不明な $\wedge$ 下×× $\vee$ 「さして」「差」(薩三〇ウ二)など三例を除き、低接型を反映すると思われる $\wedge$ 下上下 $\vee$ 「ふして」「伏」(水三四ウ二)「 $\wedge$ スエテ $\vee$ 」「 $\wedge$ ×上× $\vee$ 「取りて」(丹三八ウ七)」「もりて」「漏」(森との掛詞)。(曾二ウ七)。

二拍動詞の場合には、イ音便を除く音便形は○●▼、イ音便・非音便形は○●▽の傾向を認めてよさそうである。

なお、漢字表記のものも、多くは $\wedge$ 下×× $\vee$ の旋譜で助詞の接続型は不明。 $\wedge$ 下下× $\vee$ 「打て」(淀二八ウ二)」「 $\wedge$ ××上 $\vee$ 「待て」(鐘一二オ一)は「て」が従属型を示すと思われる、音便形で読む例と言えそうである。

二・三拍動詞は、音便形はありえないのだから、○●▼を反映する例が多くなることが予想される。一番多い旋譜例は、 $\wedge$ 下×× $\vee$ で二四例。○●▽を示すと思われるのは、 $\wedge$ 下上下 $\vee$ 「おちて」「落」(宵四二ウ四)」「さへて」「呀」(重二七ウ五)など四

例、 $\wedge \times$ 上下 $\vee$ 「いききて」〔生〕（油四〇オ2・宵四五オ7）の二例、 $\wedge$ 下上 $\times \vee$ 「さめて」〔寛〕は（今三五オ6）など九例、 $\wedge \times$ 上 $\times \vee$ 「出て」（油二七オ7）「おきて」〔起〕（曾一九オ6）など五例、 $\wedge$ 下上 $\times \vee$ 二例、 $\wedge$ 下ハル $\times \vee$ 二例を入れ、計二四例。○●あるいは○●▼○●▼を考えられるものは、 $\wedge \times$ 上上 $\vee$ 「立て」（鑓二八オ3）、 $\wedge$ 下下 $\times \vee$ 「出て」（ターウ5  $\wedge$ ハルフシ $\vee$ ) 「とげて」〔遂〕（水三〇オ8）など四例の計五例。「て」低接型が優勢である。

また、高起例も $\wedge$ 上上 $\times \vee$ 「生ても」（鑓二七ウ7）「出て」（水二七ウ8・小三五ウ7）、 $\wedge$ 上 $\times \vee$ 「なげても」（薩四二ウ6）などがみられる。特殊形に入れるべきか、強調と扱うべきか。

三拍動詞は、音便形・非音便形が共存するが、用例は音便形が圧倒的に多い。胡麻旋譜は音便形・非音便形とも○●○●と○●○●とがある。

音便形は○●○▼ $\wedge$ 上 $\times \times \vee$ 「いそいで」（油一七オ2）「このんで」（油四二ウ6）「た、いて」〔叩〕（今二六オ1）、 $\wedge \times$ 下下 $\vee$ 「もどつて」（曾四ウ8）など一六例、○●○▼ $\wedge$ 上上 $\times \times \vee$ 「いのつて」〔祈〕も（念二四オ8）「いはふて」〔祝〕（山四三ウ4）「残つて」（丹二三オ8） $\wedge \times \times$ 下下 $\vee$ 「思ふて」（堀一八ウ2）など一八例。  
○●○●と○●○●との相違は音便の種類別に拠るものでも、義

太夫生前と死後との作品例の別に拠るものでもない。音声的な揺れの現れと考えられる。

また、音便形には低起の旋譜、 $\wedge$ 下上 $\times \times \vee$ 「かせいで」（油六ウ5） $\wedge \times$ 上上下下 $\vee$ 「た、いてぞ」（薩八ウ8）などが四例ある。これは語り出しを低く始める音声変化が旋譜に現れたものであるう。

非音便形は○●○●が二例で、 $\wedge \times$ 下 $\times \times \vee$ 「かへりて」〔返〕も（曾一四オ6）、 $\wedge$ 上下 $\times \times \vee$ 「残して」（鑓三四ウ5）。○●○●は $\wedge$ 上上 $\times \times \vee$ 「うらみて」〔恨〕は（水一五オ6）、 $\wedge \times$ 下下 $\vee$ 「あまりて」（潤二二ウ4）など八例。

三・四拍動詞も○●○●と○●○●とがあり、義太夫生前・死後の作品例に拠る別はない。○●○●は $\wedge$ 上 $\times \times \vee$ 「おぼえて」（油二六オ4）、 $\wedge \times$ 下 $\times \times \vee$ 「たすけて」（念二〇オ6）など二例、○●○●は $\wedge$ 上上 $\times \times \vee$ 「しらべては」（ター二六ウ6）、 $\wedge \times$ 下下 $\vee$ 「くづれても」（万二一ウ1）など九例。

「一四」助動詞「た・たり」のつくもの

「たり」は、金田一氏は「てあり」○●○●型がまって○●○●型になり、単語連続では固有の型である○●○●型となるが、単語結合体をつくと○●○●とされた。(4) さらに、秋永氏は○●+○●○●で○●○●型が一時存在したかもしれないという。(5)

丸本では、「たり・たる」からの変化形「た」が多いが、この

場合も○のアクセントで低接型であると思われる。連用形二拍のものが低起式なので連用形一般に分類できる。

一・二拍動詞は、○の例はなく、すべて●の例。△上下V「見た」(宵三五ウ4)、△上×V「きた」(堀一七ウ2・長九オ8)など五例、△下V「きた」(氷三七ウ1・宵一五ウ5)の●▽八例。●▼は△上上V「来た」(薩四二ウ2)の一例。

二拍動詞の非音便形は六例のみで、すべて△下××V「なした」(重四ウ6)「ふしたる」(堀一ウ7・淀三六オ5・万三オ7)などの付属語接続型が不明な旋譜。また、音便形との明確な区別があるかどうか不明。

音便形の用例も「た」「たり」のどの活用形が続いても△下××V「うつたり」「打」けれ」(潤二二ウ3)「さいたる」(重三一ウ7)「くふた」(重五オ2)「よんだ」(万二〇ウ2)の旋譜例が多く二五例ある。その他△下××V「多ふた」「酔」(万三二ウ5)△上××V「切つたりや」(堀三〇ウ7)は低接、△××上上V「あつたれ共」(薩二二オ3)△××上×V「きつたり」(堀二四ウ7)△上上上×V「とつたる」(堀二二オ7)は高接例。高起式は△上××V「とつたと」(油四九ウ6)△上上×V「とつた」(経三八オ4)など四例あるが、すべて義太夫死後の作品例である。

二・三拍動詞も二拍動詞と同傾向で、△下×××V「おちたる」(薩五六ウ3)など九例。△上×××V「おちたる」(氷四

二ウ2)△下上××V「かけたる」(堀二九オ2)など合せて五例は低接、△上上××V「生たか」(鍵四七ウ7)△下上上上V「かけたる」(宵四一オ5)は従属か。高起例△上××V「とげたぞ」(生三八オ6)など八例のうち五例までが、義太夫死後の作品例。

三拍動詞は、音便形で●○○を示すのは△上×××V「思ふた」(重一五ウ4・今三八ウ7)、△下×××V「なかつた」(堀二五オ1)の三例。●●○は△上上××V「かつた」(経一五オ4)「頼んだ」(丹二九ウ5)など四例、△上上中×V「さがつた」(長三一オ8)△下×××V「とぎいた」(薩四八ウ1)の計六例。非音便形は●○○は△上×××V「落た」(経三一オ2)「申たり」(薩八ウ8)△上中××V「申たは」(丹一三ウ8)△上下××V「のぼしたが」(宵三三オ4)の四例。●●○は△上上××V「こぼした」(万二二オ7ハステV)「ゆるした」(山三五オ3)「申た」(薩五二ウ5)の三例。や音便形に●●○が多いか。

三・四拍動詞は●○○△上×××V「おほえたか」「覚」(丹三三ウ6)「覚えたり」(丹四〇オ5)△上××中V「ひらけた」と(宵二二オ5)「おほへたり」(堀二七ウ3)の四例。●○○△上××下×V「きはめたと」(曾一五ウ2)△上上××V「たすけた」(経四五ウ5)「もふけた」「設」(夕一〇ウ4)の三例。







「にし」は、 $\wedge \times \times$  下下 $\vee$  「過にし」(薩三五ウ1)  $\wedge$  上上 $\times \times \vee$  「すぎにし」(曾二一オ6)のみ。『古今集』には「訓」256に「ふきにし $\wedge$ 平上上 $\vee$ 」、[伏片・訓]90に「なりにし $\wedge \times \times$  上上 $\vee$ 」の例があり、連用形一般の特異例ではないが、丸本の例は「し」が接続すると高起になるといような類推が働いたか、連用形特殊②の例にできそうである。

## 二 連用形特殊

近世において連用形特殊は二つに分類されるが、丸本では特殊と思われる例が非常に少ない。助動詞「き」の連体形「し」と、助動詞「たし・たい」と連用形が形容詞に接続するものとの二種類に分類できる。それぞれ連用形特殊①、②としておく。

### 「二一」助動詞「き」の連体形「し」のつくもの

「し」が接続すると、連用形二拍が●○の高起式になる。これを、連用形特殊①にする。

- 一 拍動詞は $\wedge$ 上 $\times \times \vee$ 「みしや」[見] (絵四オ4)のみ。
- 二 拍動詞は●○で、 $\wedge$ 上 $\times \times \vee$ 「まちしも」(紅二六オ8・潤一オ8)  $\wedge \times$  下 $\times \vee$ 「持し」(冥九ウ7)  $\wedge$  上下下 $\vee$ 「よみしも」(堀二ウ5 $\wedge$ 謡 $\vee$ )。時代物の例を挙げておくと $\wedge$ 上 $\times \times \vee$ 「有し」(十二段三二オ1)  $\wedge$  上平 $\times \vee$ 「有しに」(十二段四七

ウ4)  $\wedge$  上下下 $\vee$ 「まきし」(出世景清二三オ6)など。低起例は $\wedge \times$  上 $\times \vee$ 「あひしは」(冥三〇オ5)  $\wedge$  下 $\times \times \vee$ 「なせし」(念一四ウ7)。

二・三拍動詞も●○ $\wedge$ 上 $\times \times \vee$ 「かけし」(念二二オ5)  $\wedge$  上下下 $\vee$ 「なれし」(冥二九オ2 $\wedge$ 謡クセ $\vee$ )  $\wedge \times$  下下 $\vee$ 「かけし」(冥一七ウ7)、●● $\wedge$ 上上 $\times \vee$ 「なれし」(冥三〇オ8)。低起例は $\wedge$ 下 $\times \times \vee$ 「たへし」(重六ウ4)。

連用形三拍は●●○と●○○の例がある。

三拍動詞は●●○ $\wedge$ 上上 $\times \times \vee$ 「思ひしに」(紅一一オ5)など、 $\wedge \times \times$  下下 $\vee$ 「かゝりしに」(薩四三オ3)「頼みし」(念一六ウ6)「作りし」(今四オ2)など、 $\wedge$ 上上 $\times \vee$ 「なげきしは」(淀一三ウ5)「帰りが」(薩三六オ8)など計一二例。●○○ $\wedge \times$  下下 $\vee$ 「やつせし」(念二四ウ2)、 $\wedge$ 上 $\times \times \vee$ 「このみし」(堀一八ウ8)  $\wedge$ 上 $\times \times$  上 $\vee$ 「ゆるみし」(曾二ウ8)など一〇例。

三・四拍動詞は●●○ $\wedge$ 上上 $\times \times \vee$ 「こぼれし」(紅三〇オ5・潤五オ5)、 $\wedge \times \times$  下下 $\vee$ 「よごれし」(念一四ウ8)の三例、●○○は $\wedge$ 上 $\times \times \times \vee$ 「みだれし」(堀一六ウ8)  $\wedge$  上下下 $\vee$ 「わかれし」(氷三八オ3)「ながれし」(小三七ウ6)の四例。

### 「二一」助動詞「たし・たい」のつくもの

奥村氏によると、「たし」は元来、終止・連体形●○、已然形

○●○、連用形●○、補助活用●○○という。連用形二拍のものに付くと○○○●○↓●●○○○、補助活用は○○●○○↓●○○○の変化を起こしたという。(ウ) 丸本では、「たし、たい」下接の二類動詞連用形二拍は●●○のものが多く、連用形特殊②とする。

一 拍動詞^上上^「見たや」(堀二一オ1・今三五オ4 ^歌^V)の二例。

二 拍動詞は●●^上上^××V「あひたい」(冥三四ウ7・夕二九ウ5・三〇ウ3)「あひたかつた」(小一八ウ2)、^上上^××\*V「なりたや」(薩四五ウ8 ^歌^V)、^上上^上上^V「討ともなふても」(薩一六ウ4)。特殊①の例か●○^上上^××下下^V「みたや」(油一オ4 ^ラソソ^V) ^上上^×××V「取たい」(今一二ウ3)。

二・三拍動詞は●●^上上^上上^××V「見せたい」(丹二三ウ2) ^上上中^×V「見せたし」(夕一三オ6)、●○^上上^下下下^V「請たやな」(網三八ウ5)。

連用形三拍は○○○○○↓●●●○○○に変化したと思われるが、実際には●●●○と●○○○である。

三拍動詞で●●●は^上上^上上^×××V「た、きたからふ」(潤一三ウ3)で補助活用の例。●●○は^上上^上上^×××V「た、きたい」(重二一ウ7) ^上上^下下××V「残したし」(鍵三四ウ3)、●○○は^上上^×××上上^V「ゆるしたふても」(経三〇オ6) ^上上^××××V「申たし」(経三九ウ5)。

### 「二二三」その他

「難し」「苦し」など形容詞出自の接尾語に続く場合も特殊に接続するとみてよいだろう。

一・二拍動詞^上上^上上^××V「見ぐるし」(堀三〇オ7)「見ぐるしい」(丹三三オ2)。

二拍動詞^上上^下下下^V「有がたや」(念一六ウ6)、^上上^××\*V「ありがたふ」(重一〇ウ5)、^上上^××平下^V「ありがたい」(冥四二オ3)など高起例が多いが、^下下^×××V「有がたいと」(長一〇オ8)の低起もみられる。

三・四拍動詞には^上上^上上^下下××V「はなれがたく」(氷二八オ1)、^上上^上上^×××V「のがれがたき」(小七ウ3)。

### 三 まとめ

丸本における二類動詞連用形のアクセントを下接の付属語とともにみてきた。以下、特徴や問題点をまとめてみる。

①丸本においては連用形二拍の胡麻旋譜により、一般形○●、特殊①●○、特殊②●●のアクセントを持つものに三分類することができる。しかし、連用形特殊①②は用例が少なく、特殊形がそれぞれかなりの用例数を持つ未然形のアクセント分類とは様相が異なり、連用形一般がいかに多いかがわかる。

②「て」の接続では、イ音便以外の音便形○●▼、非音便形とイ

音便○●▽という相違がある。

③連用形三拍は●●○と●○○の両形がみられる。中止形・複合動詞前部成素は●○○が優勢で、連体形・終止形と同傾向である。しかし、付属語を伴うものは一般形であっても●●○の例が多い。実際は、●○○と●●○とが音声的というより音楽的に揺れているとみるべきかもしれない。

④義太夫生前と死後の作品例では、生前の作品における胡麻の高低が史的アクセントに合致する率が高い。死後の作品にアクセントに合わないものが偏っており、その多くは低起式が予想される箇所「高」を示す胡麻が施されるもので、動詞のみの傾向ではない。死後、胡麻旋譜方法が変わったか、あるいは胡麻に高低以外の意味が付与されるようになったのかは今後検討したい。

⑤胡麻にはアクセントの高低とは関係ない胡麻章もある。なみだ点の直前拍に施される上げ胡麻もその例である。また、ハフシ▽などに固定的な語りとして示されるものも同様か。

胡麻の持つ意味についてはまだまだ不明な点もあり、さらに調査検討が必要である。また、文献だけではなく、現行曲での胡麻の扱われ方や、語り方などの音楽面からの考察も同時に行なう必要があろう。

注

(1) 服部四郎「国語諸方言のアクセント概観(三)」『方言』

四昭和六年(二月)

(2) 坂本清恵「丸本を資料とするアクセント研究の問題点」『国文学研究』百集(平成二年三月)

(3) 秋永一枝「古今集声点本における一・二拍動詞のアクセント―古今集動詞のアクセント―」『国文学研究』九七集(平成元年三月)

(4) 金田一春彦『四座講式の研究』(昭和三九年三月 三省堂)四七九頁

(5) 秋永一枝『古今和歌集声点本の研究 研究篇下』「助動詞のアクセント」(平成三年一月 校倉書房)二二三頁

(6) 注(4)四八一頁  
奥村三雄『平曲譜本の研究』(昭和五六年五月 桜楓社)五二二頁

注(5)二二三頁

(7) 注(5)二〇九頁

(8) 注(5)二二四頁

(9) 注(6)奥村四八六頁

参考

望月郁子『類聚名義抄 四種声点付和訓索引』

(昭和四九年三月 笠間書院)

秋永一枝『古今和歌集声点本の研究 索引篇』

奥村三雄『平家正節語彙索引』

(昭和四九年三月 校倉書房)

(昭和五八年二月 大学堂書店)

影印(A)

(絵二五才6)

(堀一五ウ3)

(重二三才7)

影印(B)

①


(曾一五才6)

②

(生四六才5)

③

(紅七ウ7)

④ 

(堀一五ウ7)

⑤ 

(堀一六ウ1)

⑥ 

(万一八オ6)

⑦ 

(氷一一ウ5)

⑧ 

(冥二七ウ2)

影印 (C)



(堀七オ3)

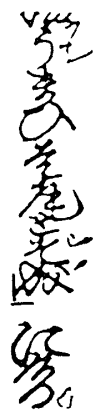


(氷二二オ6)



(今一五オ8)

影印 (D)



(長六オ1)



(万三二ウ7)



(念一八ウ7)